

はじめに

東京大学総合研究博物館には日本考古学の最重要遺跡に関する、ひとまとまりの図面が大切に保管されている。この図面は長年専用の帙に収められていた。その中にはまず毛筆で「大森介墟編 原稿図」と書かれた和紙の表題があり、その下に重ねられた一枚一枚の紙片の束が今からちょうど 140 年前、エドワード・シルベスター・モース Edward Sylvester Morse 指導のもと日本人画家木村静山が作成した大森貝塚（介墟）出土遺物の実測原図である。

はじめてこの原図の重要性を指摘したのは佐原真である。佐原は土器図に針穴と区画線が残されていることを発見し、それが単なるスケッチではなく「実測図」であるという事実に驚嘆する（佐原 1977）。

モースによって 1877 年に発見され発掘された大森貝塚の出土品は、1975 年に国重要文化財に指定されている。日本近代考古学の曙光を告げる遺跡の、出土遺物の重要性は言うまでもない。しかし大森貝塚の意義は発掘だけではない。さらにその遺物がきわめて科学的な方針に基づいて図化され、そして公開されたことである。むしろこの点の意義こそ重要である。

佐原に続き筆者も主に石器図を中心に分析を行った（田中 1991）。その際に全体を見ることができ、佐原と同じく図に示された科学性、先進性に大きな衝撃を受けた。これは単に考古学史上のみならず、広く科学史という面からももっと評価されてしかるべきである。ぜひ分析し公表したいと願ったが、すべてを調査するには現実的な問題があった。つまり 300 枚近い原図に残るかすかな痕跡を観察するには、長期にわたって綿密な作業を重ねる必要がある。しかしそのつど貴重な図面を直接取り扱うことは劣化や損傷の危険があったからである。とはいえ写真撮影してそれをを用いるにも、フィルム写真の解像度ではとても細部の観察はできない。なにより自由に作業が可能な、新たな精細画像の登場が待たれたのである。

総合研究博物館ではキュラトリアル・ワークの一環として、所蔵資料の調査と整理・報告が逐次進められ、大森貝塚についても出土標本の再整理が行われている（初鹿野他 2009・2010・初鹿野 2017）。我が国最古の教育機関に収蔵・保管されてきた資料はいずれもきわめて貴重で、それをデータベース化し公開しようとする事業は大変意義深いものである。その一環として実測原図もデジタル化され、作成されたデータを前記の経過によって筆者が利用させていただくことができた。分析を志して四半世紀、ようやく原図に残る痕跡を縦横に観察できる手段が得られた。さらに今回その成果を総合研究博物館研究報告として刊行できる運びとなった。この研究報告も源をたどればモースによる我が国最初の大学紀要、“Memoirs of the Science Department, University of Tokio, Japan” に至る。限られた状況の中で小さな破片の隅々にまで、モノの情報を科学的に捉え伝えようとしたモースたちの努力を、こうして貝塚発掘から 140 周年にあたる年に公表することができた。

田中英司
2017 年 8 月